

昔の人は偉かった・・・

こんにちは！ お元気ですか？ 先日、今年で十一回目となる「にいがた酒の陣」へ行ってきました。初日は長蛇の列で外まで続き、午後二時頃までその列が続いたそうです。私が行ったのは二日目の午後からだったのですが、さすがにすれ違いができないほどではなかったものの終了間際まで大勢の人でにぎわいをみせておりました。二日間合計の来場者は 99823 人（昨対 116%）で初日の土曜日は市内のホテルがほぼ満室状態、県外客の多さを物語っており、まさに新潟の一大イベントに成長したと言えるのではないのでしょうか。

さて話は変わりますが・・・。私は中学・高校時代、バレーボール部に入り勉強そっちのけで部活にいそしんでおりました。（おかげで成績は目も当てられない状況で・・・いやいや部活のせいにしてはいけません！）基礎トレーニングから始まりパス、サーブ、アタック、ブロック、レシーブ、そして試合形式と、練習は進んでいきます。当時女子バレーと言えば「回転レシーブ」。もはや絶えて久しいですが、我々の時代はいかに回転レシーブがきれいにでき、早く立ち上がり次の動作に移れるかを飽きもせず練習し、毎日体育館の床をモップ替わりよろしくコロコロ転がっておりました。おかげで突き指、打ち身、捻挫の常習犯、随分テーピングのお世話になったものです。その中で捻挫は一度やると同じ足を二度三度とやるんですね。そんな時にとっても効果的だったのは「小麦粉シップ」小麦粉と酢を混ぜ合わせ、ガーゼなどの生地に塗って患部に貼り付けます。

酔の特有の臭いがするし、下手すればはみ出てくるのでちよつと厄介なのですが、これがすごい。患部の熱をみるみる吸収してガビガビに乾いてしまいます。これを幾度か貼りかえていくと乾き方が遅くなり、熱も痛みも取れていきます。これは祖母から母へと受け継がれた生活の知恵なのですね。

つい最近、この湿布を使用することがありました。もちろんその当ても今も市販の様々な湿布薬があるじゃないか！というところなのですが、常日頃口にしてる食材でそのようなことが出来るということを知っておくことは、いざという時に役に立つものだと思います。この湿布に限らず他にも様々な昔の知恵が、現代にも息づいています。私たちはそのような知恵を、後世に受け継いでいくべきなのだろうなと思うこの頃です。

## 日本の野鳥シリーズ

### オオタカの狩り

技術営業部 佐藤 弘

桜も見ごろを過ぎた頃、ヒヨドリの渡りコース調査で見晴らしがよい堤防に上がっていた。近くの休耕田では雄キジが餌をついばむのどかな田園風景だった。しかし、キジは時おり周りを見まわして警戒を怠らない。すると堤防の斜面を滑空して下る灰色の鳥が目に入った。オオタカだ。急降下で加速したタカは、まったく羽ばたかず（後で調べたら）90m先のキジに迫った。堤防を背に見つかりにくい地をほうような低空飛行の奇襲だ。

オオタカの武器はもちろん鋭い爪だが、雄キジも蹴爪（けづめ）と呼ぶバラのトゲ状の大きな突起を持つ。さあこの先どうなるか、私は文字通り高みの見物。「ケーン」のひと声にキジがやられたと思ったら、これは仲間に危険を知らせる警戒音だったようだ。キジは攻撃をかわし、タカが来たルートを逆行して堤防を越え、クズの葉が密にかぶさる河川敷のヤブに飛びこんだ。たまげたことに、翼を大切にする筈のタカも後に続いた。あとは藪の中、何があったのか私には分からない。

だが数日後に雄キジは同じ場所に姿を現したから、無傷だったようだ。ヤブの中を駆けまわるのはキジの得意とするところだし、一方本種の歩みはペンギンのようにぎこちない。この勝負は決着がつかなかったらしい。ふと、案外この二羽は「いつかお前をシメてやる」「やれるものならやってみな、返り討ちだ」という、前からのケンカ相手ではないかと思えてきた。

たまには狩りが成功するからタカは生きている。どの時代どの民族か知らないがそんな場面を見た男が、オレが弓矢でへボな狩りをするよりずっとマシではないかと、タカ狩りを考えついたのだろうと想像する。そして試行錯誤の末に、意思を持つ飛び道具としてタカを自在に扱う技法を確立したものと思う。

本種は自分とほぼ同大のカラスを仕留め、高さにもよるが巣まで運び上げるパワーがあるとは、長年研究を続けている大先輩の話だ。さらに、枯れ枝を積み重ねた本種の巣の中に、あろうことかスズメが巣を架けた映像を見せてくれた。本来ホール・ネスターのスズメが営巣場所を探しあぐねてのことなのか、それとも、カラス怖さにもっと恐ろしいオオタカを用心棒にと頼ったのか分からない。このスズメはまるで「窮鳥ふところに入らば獵師もこれを討たず」のたとえを知っているかのようだ。こうすればこうなるという、因果関係を理解しているのならすごい。

# “ちょっと一息”

## “祭典、採点”

No.12

技術営業部 副部長 山本知男

ソチ・オリンピックで一喜一憂していたのが昨日のこのように感じますが、皆さんも寝不足になりながら応援していた事と思います。それにしても採点競技と言うのは何か釈然としない事が多くて不満が募ります。

遠くに飛んだとか早く走ったなどと言うのは勝敗がはっきりして納得するものですが、採点となると“え〜???”ってなるのも多く、毎回批判は出て来ますね。オリンピックとなるとレベル的には最高の人たちが最高のものを出すわけで、それを審査しなきゃいけない審査員に同情する面もありますが・・・。

吹奏楽でもコンクールと言うのがあって、最高峰では全日本吹奏楽コンクールと言う、吹奏楽の甲子園と言われているものがあります。

コンクールはまさに採点競技で、技術点と芸術点の合計で競い合うものですが、地区大会くらいだとレベルの差はかなりあって、誰が聞いても“こりゃヘタだ”と言う所と“さすが!”と言う所はかなりはっきりと私でも分かるくらいの差があります。しかし県大会、支部大会、全日本大会となるにつれ差はなくなり、これどうやって差を付けるんだらうって不思議なくらいです。まさに審査員ならではなんでしょう。でも大体一番最初に演奏する団体は不利のようです。やはり最初から10点なんて付けると、それ以上になった場合の点の付けようがないと言うところでしょうか。私らも一番クジを引いた時は、こりゃダメだと半ば諦めムードが漂ったものです。

オリンピックは祭典でもあり、採点で泣き笑いのドラマが生まれたように感じました。

話は変わりますが、この春の時期になると昇給話も出て来ます。世間では春闘とか頑張っている所もありますが、我社は穏便に上司の査定、社長決裁で行われています。なかなか景気回復の実感が湧かないのですが、今年はどうなのでしょう(^\_^)。

さてこの査定もなかなか難しい。やはり最初に査定する人は点が付き難いので、公平を期する為に何回も見直しします。それこそいろんな項目があり、そこに各点を付けて行くのですが、我社社員もそこそこベテランの域に来ている人ばかりなので、なかなか差がつけ難い。薄くなった頭を掻きむしりながら採点するわけですが、こんなに苦労しても不満は出る。みんなが納得する採点方法があればなあ〜、と思いながらの採点ですね。

# ◆ ちょっと豆知識 ◆ その19

## 「災い転じて・・・」

技術営業部 部長 成田 護 (mamoru@shinyo.co.jp)

問題。「種麴の量はどこまで減らして麴になるでしょう?」。

お客様のところにお邪魔した際、私からよく投げ掛ける問題ですので、正解をご存知の方も大勢いらっしゃると思います。普通の酒造りの現場において、あえてこの課題に取り組む必要性はおそらくどこにもないのですが、でもきっと何かの時に、「知らずで良かった知識」にはなると思います。

前職において、上述の課題に取り組む機会がありました。

そこでは種麴に「粉(こな)菌」を使っておりましたが、たまたまその日の麴は、明らかに菌の生育が遅い、温度が来ない、状態がおかしい・・・。

疑われたのが「50.0gのところを5.0gしか振らなかったんじゃないか?」ということでした。

いきなり再現試験はしたくなかったので、取りあえず種付け量半分、それで上手く行けば半分・・・と徐々に種付け量を減らして行く実験計画を立てました。

前職の上司が理解のある方だったので相談すると「ちゃんと酒にするのを条件に、自分で調べてみれば良いさ」とおっしゃって下さいました。

果たして、所定量の1/32、すなわち粉菌だと白米200kgあたり70gが標準だと思いますが、200kgあたり2.2gまで減らしても、問題なく(生育は遅くなるが)麴になることを確認しました。

副次的な効果として、

種の量が減っていけば、状態は「超突きハゼ」になる(当然ですが)

あるところを境に、種麴量を1/2にすると、温度の経過が2~2.5h、グルコアミラーゼ活性の立ち上がりも2~2.5h遅れていく

ことを確認しました。

醗・添・仲・留麴、と順を追って種麴量を減らしていくのが一般的ですが、かねてより「なんでだろう?」と思っていたので、「種麴量を減らすことの意義」を解明するヒントが得られたと喜び勇んだのを覚えています。結局異動もあって「解明」には至りませんでした・・・。

間違いは無いに越したことはないですが、間違ってしまったものは、積極的に「勉強のチャンス」と捉える事が必要ではないかと常々思っています。

先述の「種付け量が1/10となってしまった事故」は、「種付け量」を考える非常に良いきっかけとなりました。それを契機に酒造り自体も大きく変わりました。

学ぶチャンスはそこそこに嫌という程転がっています。「それに気付ける心の感度」を常に備えていたいと思っています。

## エッセイ

### 日曜日の過ごし方

生産部 島貫 修一

住んでいるのは新潟市西区。週末のショッピングエリアは三つあり、地区名で言うと山田と小新(こしん)南と小新白鳥。山田はスーパー・ホームセンター・ドラッグストア・スポーツ用品店に各種飲食店がある。小新南には大手のショッピングセンターAEと、周辺に紳士服店・靴屋・家具雑貨店・各種飲食店が揃っている。そして小新白鳥にも大手のショッピングセンターAPと家電量販店にホームセンターがある。この三箇所では衣・食と日用品には不自由しないが、本についてはAEとAPの中の小さな書店だけ。面白い本を読みたくなったら、市内中心部の古町・万代・駅南の大型書店まで行っていた。

ところが昨秋から事情が変わってきた。小新南から西に約800m離れた亀貝(かめがい)が区画整理され、新しい商業施設が次々に開店し、その中に待望の大型書店があった。

更に同じ区画にスーパー・ホームセンター・家電量販店・ドラッグストアにファストファッションのUもできた。願ったり叶ったりとはこのことではないか。

とある日曜日の朝、開店時刻の10時ぴったりに書店に入る。最初に雑誌、続いて単行本と文庫本の順で本棚を見て回り、興味を引いた本のページをめくる。予算内で収まるように数冊選びレジへ行く。ここまでで入店してから30分から40分。次に書店内併設のカフェでコーヒーを飲みながら本をさっと読む(名古屋に本店がある珈琲店の1.5倍コーヒーのほうがおいしい)。そして11時に書店を出てスーパーで食材と弁当を買い、ついでに隣のUも物色してから帰るとちょうど12時。さあて弁当食べてから読書タイムだ。